

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

| | |
|------------|---|
| Title | ライブニッツと先学者たち--初期論文「観念とはなにか」(1678)をめぐって |
| Author(s) | 森. 啓 |
| Citation | 茨城大学教養部紀要(24): 315-322 |
| Issue Date | 1992 |
| URL | http://hdl.handle.net/10109/9849 |
| Rights | |

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

ライプニッツと先学者たち

—初期論文「観念とはなにか」(1678)をめぐる—

森 啓

(一)

『ライプニッツ哲学著作集』の編者ゲルハルトの推測によれば、この論文はライプニッツがスピノザの著『エティカ』Ethicaを研究したことから生まれたもの、という¹⁾。ライプニッツとスピノザの関わりについては、ゲルハルト自身きわめて有益な解説を添えてくれているが(G. I, S. 115-120)、しかし私は、これを参照しつつも、私なりに工夫して、少しばかり確かめておきたい。

多方面の事柄に終生ふかい関心をもち続けたライプニッツは、はやくからスピノザの名を知っていた。22歳のとき、「デカルト主義者」としてクラウベルク Clauberg, レー Raey, クレルスリエ Clerselier, ヘーレボルト Heerebord, レギウス Regius, といった人びとに並べて、スピノザの名を挙げている。しかし、その評価はいたって厳しく、「師デカルトの為しとげた発見に何かをつけ加えた者はいなかった」「師匠の積義本を出版しているだけだ」ときめ付けている。そして、「私自身はデカルト主義者なんかではない」と言いきっている²⁾。——ただ、ライプニッツのこの発言がこうした人たちの著作なり思想をどの程度実地に学んだ上でのものであるか、は定かでない。スピノザについていえば、もしライプニッツがなにかスピノザの著書を具体的に考えているとするなら、それはスピノザが1663年に公刊した『デカルトの哲学原理』であろう。しかしこの本はもともと、スピノザが一青年に「デカルト哲学を教える」という意図から出ている。目的が目的であっただけに、スピノザが自分の見解を抑え「積義」に徹したのは、むしろ当然のことであった³⁾。この事実気づいたためかどうか、理由ははっきりしないが、ライプニッツはのち、上記「デカルト主義者」の間からスピノザの名を削っている(G., IV, S. 163. I, S. 15. Anm.)。

さてライプニッツは1671年(25歳)になるとスピノザに礼を尽くした手紙を出し、あわせて自らの小論文を献呈した⁴⁾。この時スピノザは39歳。まさに話題の人物であった。というよりも、不評のただなかにあった。というのもスピノザはその前年、大著『神学政治論』を出版し、当時の宗教・政治のあり方を全面的に、大胆に、批判していたのである。匿名出版にしたものの、著者であることが判ってしまい、けっきょくスピノザは身の危険を避けるため、住み慣れた村から大都会ハーグへ転居したという。(もっとも、これは決して唐突の事態ではない。そもそもスピノザは、青年時代に、「無神論」の廉で告発され、当時住んでいたオランダ・アムステルダムユダヤ人社会から破門されている。)——では、そういう前歴の持ち主、そういう現状にあったスピノザに、なぜライプニッツは接触を試みたのか。(スピノザが『神学政治論』の著者であることは、ライプニッツはす

で友人から聞かされて知っていた。G., I, S. 115)。理由はよく判らない。ただスピノザ宛の手紙はこうした生々しい出来事には一切ふれず、話は専らスピノザの得意とする光学のことであった。——これに対するスピノザの返事は意外に親切なものであった。手紙の終りには、率直というべきか、あるいは無用心というべきか、ライプニッツの手元に『神学政治論』がないなら、「お差し支えなければ一冊お送りしましょう」と伝えている⁵⁾。この申し出にライプニッツはどう反応したか。はなはだ興味あるところだが、残念ながら資料がない。

しかし、その数年後、スピノザには気持の変化がうかがえる。1675年、スピノザの知友チルンハウスがパリへ行き、パリ滞在中のライプニッツと親しくなった。チルンハウスはライプニッツこそスピノザ思想を伝えるべき人と判断し、スピノザの「書いたもの」scriptaを見せてもよいかどうか、スピノザに問い合わせてきた。（「書いたもの」とは、『エティカ』の写し、または、その一部分、と推定される。懇意の仲間のあいだには、以前から写しが出ていたのである）。しかし、スピノザはこの申し出には乗らなかった。スピノザはいう。ライプニッツとは、数年まえ手紙をくれた、あのライプニッツ氏であろう。しかし、「何のためにフランスへ行っているのか」。まずはライプニッツと「もっと長い間つき合って、ライプニッツの性格・行状moresをもっと親しく知って」もらいたい、と⁶⁾。——スピノザはライプニッツに対し、やや警戒心を懐いているように見うけられる。

しかし翌1676年、けっきょくスピノザはライプニッツに会った。パリからドイツへ帰る途中のライプニッツがオランダに寄り、ハーグに居るスピノザを訪ねたのである。ライプニッツがハーグに滞在していた日数は、「けっこう長かったらしい」⁷⁾。そしてライプニッツ本人も「スピノザとは何回も plusieurs fois ずいぶん長い時間 et fort long temps, 話をした」と語っている（G., I, S. 118）。重なる面談でスピノザの気持も和んだのか、スピノザはライプニッツに『エティカ』の原稿をみせたという⁸⁾。ときにスピノザは44歳、ライプニッツは30歳であった。——しかし、その後数ヶ月、スピノザは早くも他界。友人たちの手によって『スピノザ遺稿集』が編まれた。1677年暮に刊行。翌1678年1月、さっそくライプニッツのもとへその一冊が送り届けられた。ライプニッツが『遺稿集』のなかの『エティカ』を急ぎ熟読したのであろうことは、当然である。読みつつ相当量の書きこみをしていった。ゲルハルトは自らの『ライプニッツ哲学著作集』のなかに、これを再現している（G., I, S. 139-152）。

（二）

ところで『エティカ』第一部にあっては、「真の観念idea veraは、その観念の示すところのもの〔対象〕と合致しなくてはならない」ということが、証明の要らない「公理」とされている（公理6）。続いて第二部に至ると「充実な観念」idea adaequataがとり挙げられ、「それは、対象との関連なしでそれ自体で考察された場合に、真の観念のもっている特質、または、内的な特徴、をすべて持ちあわせている観念のことである」（定義4）。しかし、これら二つの規定は互いに別々に掲げられているだけで、その関連・関係については何も述べられていない。哲学史の用語でいえば、真理についての相応説correspondence theoryと整合説coherence theoryとが（普通はたがいに対立したものと理解されるのに）、スピノザにあっては共に認められている、といった有様である。論証法・

論理的な脈絡づけにひときわ敏感なライプニッツがこれを見逃すはずはない。二つ目の規定の箇所
で、「だから、真の観念とはなんであるのか、を〔まず〕説明しておかなくてはいけなかった」とい
う不満を漏らした (G., I, S. 150)。——もっとも、「観念」idea についてならば、『エティカ』の
なかに説明がないわけでない。それは「精神が、思惟するものであることのゆえに形成する、精神
の概念」と定義され、さらに若干の解説が加えられている (2部定義3)。しかしこれは、観念の
「真」「真たること」を説明するものではない。

さて、ライプニッツの論文「観念とはなにか」Quid sit Ideaは前述のとおり、こうした『エティ
カ』研究を機縁に書かれたものであろう。しかし、この論文はゲルハルト版で僅か2ページ (G.,
VII, S. 263f)。きわめて短いものである。本来、「論文」というよりは、むしろ「小品」「素描」「草
案」といったほうが適切であるかも知れない。叙述が簡潔にすぎて内容の理解に困る箇所もある。
ましてや、スピノザののこした難点を処理するには程遠い。そもそもスピノザには、「真の観念とは
なんであるのか」の説明を要求しておきながら、自らのこの論文はこの問題を全くとり上げてない
(思想家としてだけでなく、実際の社会人としてもきわめて多忙な日々を送っていたライプニッツ
である。やむなき事情もあったろう)。しかし、この論文はその後のライプニッツ哲学を方向づける
大切な要素を含んでいると思われる。簡単に紹介し、あわせて私の考えるところも記しておきたい。

論文前半 (263ページ, 19行まで) のライプニッツは、観念の正体を定めるべく努力している。ま
ず、観念 idea とは「われわれの精神のなかにある、或るもの」という。しかし、「或るもの」
aliquid では説明したことにはならない。それに、精神のなかには観念以外のものもいろいろある。
たとえば「思考」cogitationes, 「認知〔判断〕」perceptiones, 「感情」affectus など。こうしたものは
「観念がなければ起こらないけれども」、それ自体、観念なのではない。なぜか。観念は「思惟の、
なにか働き actus のうちにあるのではなく、能力 facultas のうちにあるからである」。ライプニッツ
は、しかし、これでも満足せず、「能力」にいろいろ種類を考えている。レムカーの註解によれば、
それは直観的な把握能力と段階的な推論能力の別を指すようであるが (Loemker, op. cit., p 208,
note 1), いずれにしてもライプニッツの論述は簡略で、その真意は充分には汲みとれない。けっ
きよく、観念とは「私のなかであって、〔私を〕ただ単にもの res に導くだけではなく、また、その
ものを表出 exprimere している、或るもの」というに終っている。「或るもの」では規定としてまず
いこと、上述のとおりなのであるが。

観念とは、とにも角にも、「精神」mens のなかにあるとされた。ところで脳は、精神ではなく、
これとは別個の身体 (の一部) である。だから、「脳に刻みこまれている跡」vestigia などは、ライ
プニッツによれば、「観念ではない」。「脳」「脳という実質のうちの、より精妙な部分」、という表現
もあって、ここではデカルトの「動物精気」「松果腺」の説が意識されているのかも知れない。(た
だ、ライプニッツはこの論文のなかでは、人の名前はいっさい出していない)。——だが、このこ
と以上に興味ぶかい事実がある。原文をよくみると、前述の「精神」には二ヶ所にわたって、文法
用語でいう所有代名詞が冠せられているのである。すなわち、精神は「われわれの」精神 mens
nostra となっている (2行目, 5行目)。だから観念とは、「われわれの」精神のなかにあるもの、
である。もっともライプニッツは、はじめからこのことを主張していた。前述の引用文には、「私のな
かであって」in me, ……とある (18行目。傍点はいずれも森による)。

(三)

このことは、別になんでもない事柄のように見えるかも知れない。現代の人間にとってはむしろ当然のことと感じられよう。しかし私はそうは考えない。問題を広い視野からとらえた上でライブニッツが下した一つの判断ではなかったか、と思う。まずは、哲学史家コプルストンの教えるところを手引きに、できる限り簡潔に、歴史を顧みておこう。——そもそもライブニッツが用いたラテン語“idea”をどう読んだものか。これが問題の分れ道である。英語風に「アイディア」と解すれば、それなりの意味が想い浮かぶ。しかし、「イデア」と読めば、古代ギリシアのプラトンの説が連想される。プラトンはいろいろの箇所、さまざまなことを、しかも、きわめて巧みな表現を駆使して述べるので、その真意はなかなか捉えにくい。しかし、コプルストンによれば、プラトンのいうイデアとは、われわれの普遍的な概念のもっている「客観的な内容」the objective contentであり、また、われわれが普遍的な概念のうちに認める「客観的な本質」objective essencesのことである（ちなみに、「客観的な本質」という言い廻しはコプルストンの好きな表現らしく、たびたび出てくる）。ところで、そのイデアのある在り方である。プラトンは対話篇『ティマイオス』で、世界の形成者デミウルゴスを、世界形成にあたってイデアを見做ったものとして描いている。とすれば、イデア（範型因）はデミウルゴス（作動因）から全く切り離されているものとなるわけで、もしデミウルゴスを「神」とよぶならば、イデアはこの世界の事物の「外」outsideにあるばかりでなく、神の「外」にすらある、と結論づけなくてはなるまい。しかし、イデアは本来、精神的なものである。時間・空間の範疇に入らないものについては、「どこにあるのか」という問いは、そもそも意味をなさないのである。プラトンが応々にしている、個物から「離れた」存在というのも、「空間的に離れている」spatially separateということではない。同様に、個物を「超越してある」ということも、その意味は、イデアは感覚的な個物といっしょに変わったり滅びたりするものではない、ということである。イデアは、いうならば「自立的な実在」a subsistent realityである。——しかし時代が下ると、イデアを神の精神に引き寄せようとする動きが出る。たとえば、アレキサンドリアのユダヤ人哲学者フィロン（紀元前後に活躍）においては、「プラトンのイデアは、[神の第一子である] ロゴスのうちに据えられ、だからロゴスがイデア界の位置する場所となる」。さらに紀元後3世紀ごろの新プラトン学派に至れば、「イデアは、種のイデアばかりか諸個物のイデアまでも、理性〔一者からの第一流出者〕のうちに存在する」ことになる。こうして、コプルストンによれば、新プラトン学派はイデアを「神の精神the divine mindのうちに」「定着させた」‘located’のである。アウグスティヌス（354—430）がプラトンと新プラトン学派のプロティノスを賞賛することができたのは、正しく「こうしたためである」、という⁹⁾。

さて、コプルストンの見解はこの程度にとどめ、われわれの主張に戻ろう。17世紀、近代哲学期の初頭にあつてデカルトはこう証言している。「イデア」という言葉は、「[スコラ] 哲学者たちによって使い古されていた」ものであつて、それは「神の精神がもっている諸知覚の形相 *formae perceptionum mentis divinae*」を指していた、と¹⁰⁾。スコラ哲学者たちにとって、イデアが神の精神のうちに在ることは、むしろ常識であつたといえよう。——ところで、ライブニッツの時代にあつてこうした古来の伝統にもっとも忠実であつたひとは、マルブランシュ（1638—1715）であつたろう。ライブニッツより8歳の年長。若くしてオラトワール修道会に身を投じ、その会の特

徴である強いアウグスティヌス主義のうちに生きた。と同時に熱心なデカルト哲学研究者でもあった。「われわれは万物を神のなかに見る」という主張で知られ、その意味は、「われわれの観念はすべて、神という効能ある実体のうちに、ある」ということであった¹¹⁾。

ライプニッツはプラトンには尊敬の念をもっていた。また、親近感も寄せていた¹²⁾。他方、先輩のマルブランシュとはパリ滞在中に知り合い、親しく交誼にあずかった。マルブランシュの大著『真理の探究』が出版されたのは(1674-1675)、ちょうどそのころであった¹³⁾。——ライプニッツは元来、調和の人であった。他人の長所をとり入れ、これを生かすことにかけては抜群の能力をもっていた。したがって古来のイデア論の伝統を無下に斥けることは絶対にしない。といって時代は17世紀も既に後半。特にデカルト(1596-1650)が一生面を開いたあとである。伝統を無条件に継承するわけにもいかない。「観念」として「われわれの精神」のなかに配置しつつも¹⁴⁾、「イデア」としての客観的な性格(コプルストンのいう objective essences)という面を、こんどは観念のもつ内容として、確保していくであろう。この面が、論文の後半にいう「表出」に他ならない¹⁵⁾。

論文後半(263ページ, 20行以下)は、やはり短い分量ではあるが、専ら「表出」を論じている。ライプニッツはさまざまな例を挙げて、表出の型をいろいろ考えている。しかし、そもそも「表出」*expressio*とはどういうことか¹⁶⁾。「AがBを表出する」とは、「Bのありよう *habitudines* に対応しているありようがAのうちにある」、ということである。(ラテン語 "*habitudines*" は、なかなか訳しにくい。動詞 "*habeo*" [持つ・保つ] に由来する言葉で、本来、保たれているもの・習わしとなっている状態、といった意味あいがある。レムカーはその英訳集において "*relations*" と訳出している。前掲書、207ページ。一見識である)。そしてここで大事なことは、双方の「ありよう」が互に対応 *respondere* していることである。これさえあればよいのであって、「AとBが似ている必要は全くない」。AはBと似てはいなくても、「Aのなかのありようを考察すれば、もうそれだけで、これに対応しているBの性質の認識に入っていけるのである」。——例をとってみよう。われわれのもつ「円の観念は円とは似ていない」。それは当たりまえで、円の観念は円のように丸いものではないからである。しかし、「円の観念からは、現実の円において経験的にきちんと確かめられるはずの真理を、導き出せるのである」。

しかし、どうしてそんなに具合よくいけるのか。ライプニッツはいう。そもそも「ものごとの観念がわれわれのなかに *in nobis* あるということは」、「ものごとの作者であると共に精神の作者でもある神が、われわれの精神に或る思惟能力を——ものごとから帰結する事柄に完璧に対応しているところのものを、自らの思惟能力から導出できるようにと——込めておいたことに他ならない」。「完璧に対応している」*perfecte respondere* という表現を見逃してはならない。ライプニッツのこの発言は、私にはきわめて大胆なものに映る。もし発言のとおりだとするならば、人間は、観念の分析を基にして演繹的に世界を説明することが(少なくとも理論の上では)可能となるだろう。しかし、肝心の発言自体はどのようにして立証されるのか。それともこの発言は、キリスト教徒でもあったライプニッツの信念の吐露とみなすべきか。もはやライプニッツは何も語らない。

論文「観念とはなにか」はライプニッツ32歳ころの作。前述のとおり、分量も少なく内容も精密なものではない。しかし、その後のライプニッツ哲学の展開をみると、非凡な構想を含んでいることは否定できない。

註

1) C. J. Gerhardt : Die Philosophischen Schriften von G. W. Leibniz. 7 Bände, Berlin, 1875-1890 (Nachdruck, Hildesheim. New York, 1978), VI, S. 251f.——以後、この著作集をGと略記。出典明示には巻数、ページ数をもって示す。本論文「観念とはなにか」は、第7巻、263-264ページに収録されている。原文はラテン語である。

なお、次の英訳集には大いに助けられた。当該論文はその207-208ページにある。

L. E. Loemker : G. W. Leibniz, Philosophical Papers and Letters. 2nd Edition, Dordrecht, Holland. 1969.

2) 1669年4月30日付け、トマジウス宛の手紙 (G., I, S. 16)。——なおゲルハルト版には日付けが「4月20・30日」と二通り記されている (S. 27, Anm.)。これは、当時まだユリウス (旧) 暦がグレゴリウス (新) 暦とともに用いられる場合があった、という事情による (Loemker, op. cit., p. 103, references *)。

3) C. Gebhardt : Spinoza Opera, Heidelberg, 4 Bände, 1925. I, S. 131 (畠中尚志訳、『デカルトの哲学原理』, 岩波文庫, 昭和34年 [1959], 16ページ)。

4) G., I, S. 121f. 同じものがスピノザ全集のほうにも載っている。Gebhardt, op. cit., IV, S. 230f (畠中尚志訳、『スピノザ往復書簡集』, 岩波文庫, 昭和33年 [1958]。書簡45.228-230ページ)。

5) G., I, S. 123. Gebhardt, op. cit., IV, S. 234 (畠中訳、『スピノザ往復書簡集』。書簡46. 232ページ)。

6) このやりとりは、スピノザの弟子シューラーを介して行なわれた。Gebhardt, op. cit., IV, S. 302f. S. 305 (畠中訳、『スピノザ往復書簡集』。書簡70, 同72. 319-320ページ, 323ページ)。

7) E. J. Aiton : Leibniz-A Biography, Bristol and Boston, Adam Hilger Ltd, 1985. p. 69 (渡辺正雄・原純夫・佐柳文男訳、『ライプニッツの普遍計画——バロックの天才の生涯』, 東京, 工作舎, 1990年, 107ページ)。

8) J. Freudenthal : Spinoza, Leben und Lehre. Heidelberg, Carl Winter, 1927. Erster Teil, Das Leben Spinozas, S. 271, S. 344 Anm. (工藤喜作訳、『スピノザの生涯』, 埼玉県入間, 哲書房, 1982年, 345ページ, 453ページ註31)。——しかし訳者の工藤氏は、自分の考えとしては、この事実疑問を投げかけている。「しかし、もともと信頼のおけなかったライプニッツに、スピノザがただ一度の会見で、いきなり『エチカ』の草稿をみせたとは信じ難い。死の四ヶ月前の衰弱しきったスピノザが、長時間話し合ったということも信じられない。……」(工藤喜作『スピノザ』,

「人類の知的遺産」35, 東京, 講談社, 昭和54年〔1979〕, 156ページ)。

9) F. Copleston : A History of Philosophy, New York, Image Books edition, 1962による。依拠した章, 引用した語句の出典を挙げるならば, vol. I, Part1, chapter12 : The doctrine of Forms, p. 189f, 192f, 195f, 200. vol. I, Part2, Chapter44 : Jewish-Hellenistic Philosophy, p. 203, 211. vol. II, Part1, Chapter27 : St. Bonaventure-III, Relation of creatures to God, p. 289など。
(ほぼ同趣旨の主張は, A. H. アームストロングにもうかがえる。岡野昌雄・川田親之訳, 『古代哲学史——タレスからアウグスティヌスまで——』, みすず書房, 1987年。51, 56-57, 66-68, 214-216, 245-247, 276-279ページ)。

なお, 両大家の指摘を機縁に, スピノザ研究においても著名なウルフソンの下記の書を読み, 当時の思想状況について, いろいろ多くを学んだ。しかし, 本稿には生かしていない。

H. A. Wolfson : The Philosophy of the Church Fathers, Faith · Trinity · Incarnation, third edition, revised, Harvard University Press, 1976. なかでも第13章, The Logos and the Platonic Ideasの箇所。

10) 『省察』第3答弁, 第5解答 (C. Adam-P. Tannery : Oeuvres de Descartes, Paris, Vrin. VI, p. 181.)。

11) Nicolas Malebranche : De la Recherche de la Vérité, introduction et text établi par G. Rodis-Lewis, Paris, Vrin, 1962. Livre III, Parti2, Chapitre6, p. 251.

12) たとえば, 『形而上学叙説』(1686)の20章を参照。そこには, プラトン『パイドン』の一節が, 「ソクラテスの美しい言葉」として, ながながと引用されている(レスティエンヌ版による。Discours de Métaphysique par G. W. Leibniz, par H. Lestienne, Paris, 1907. Nouvelle édition, Paris, Vrin, 1983. P. 62)。——さらに後年のライプニッツは, イギリス経験論哲学の代表者, かつ『人間知性論』の著者, ロックに対抗して, こう言っている。「彼の学説はアリストテレスに近く, 私のはプラトンに近い」(『人間知性新論』〔1704〕, 序文。G., V, S. 41)。

13) 詳しくは, A. Robinet : Malebranche et Leibniz, Relations Personnelles, Paris, Vrin, 1955。簡潔には, R. N. D. Martin and S. Brown : G. W. Leibniz, Discourse on Metaphysics and related writings, Manchester University Press, 1988. p. 1f, 11, 18f, 115。

14) 後年のライプニッツは明言している。「われわれだって当然, 自分で観念をもっている筈である」(『認識・真理・観念についての省察』〔1684〕, G. IV, S. 426)。「<私が他者の観念によって考える>なんて, おかしい」(『形而上学叙説』, 29章)。

15) 観念の中身に着眼すること自体は, なにもライプニッツの創見ではない。そもそも観念とは, なにかについての観念であるわけで, デカルトもこの点にはたびたび触れている。「ところで,

われわれのうちにある観念をさらに考察してみるに、これら観念がある種の思惟の様態であるかぎり、それら相互の間に大差はないが、ある観念がある事物を表現し、他の観念が他の事物を表現しているかぎりでは、それらの観念ははなはだ異なっている、ということがわかる」（『哲学の原理』1部17章。野田又夫、『デカルト』、中央公論社、「世界の名著」22、昭和42年〔1967〕、338ページ。井上庄七・水野和久氏の訳による）。

16) ラテン語の「表出」「表出する」*exprimo*は、*ex*〔from〕 + *premo*〔press〕に由来するとみなされる。したがって、うちにあるものを内から外へ押し出して、あらわにする、といった響きがある。ライプニッツがこの言葉を採用した理由として、精神（観念）がなにかを外から写し取るという受容性ではなく、積極的に表わし出すという能動性を強調したい、という気持があったのであろう。——そして、じっさい、「表出」は、のちのライプニッツ哲学の基本概念になっていく。

（了）